

## 海辺涅槃

我等の自動車は猛烈な速さで海辺の道をとばしてゐた  
右側の山裾に沿つて曲り  
巖は黒 草は緑  
俺は彼に言つた  
「海のあるな風に荒れてゐるのが好きなんだ  
ここがどこか北洋の島の一部であるかのやうな気がする」  
彼は前方を見ながら声をおとして言つた  
「全くさうです ここはどこか ここではない所のやうに感じられます」  
何でもないふりをしてゐる二人の前には道だけがあつた  
(俺は彼からハンドルを奪ひ取つて俺のものにしなくてはならない)  
「地の上をたしかめながら行くのです どこまでも行きます」  
「さうかね どこまでも行くのか」  
卑屈に笑つて 俺はそつと彼の手からハンドルを取り 自分の方に寄せた  
「岬の先の巖の上に足をかけて下の泡立つ波をのぞいたこともある  
岬の先の松の木の間から身を投げようとしたこともある  
岬の先の草の中で少女にいたづらしようと思つたこともある」  
「でも そんなことを考へただけなんだろう」  
三角波になつてゐる  
三角波になつてゐる  
のしかかり しぶき のしかかり  
急にのめりこんでゐる波  
ひきぎはにはずるずるとずつて行く  
断絶した白い線 心がたかぶつてくる  
道の真中をこちらに向つて歩いて来る男がゐた  
「あの男をやつちまふぞ」  
「あれはあなたですよ うなだれてゐますがいいのですか」  
「いいんだ 俺ではない 俺はあいつをやつちまふんだ」  
「あれはあなたですよ」  
俺の目的物 その男は飛び散つた  
ふと気がつく と 自動車の中は 薔薇のほひでいつぱいになつてゐた  
バックミラーには うしろの方に花びらが散つてゐるのが 映つてゐた  
三角波になつてゐる  
三角波になつてゐる  
のしかかり しぶき のしかかり  
急にのめりこんでゐる波  
ひきぎはにはずるずるとずつて行く  
断絶した白い線 心がたかぶつてくる

ひとひら ひとひら 小さい色になつて  
花びらがうしろに飛んで行つた  
「俺たちは花をのせて走つてみたのか」  
「ごらんなさい あれはあなたですよ あれは花  
自動車も花 あなたも花」  
彼の方を横目で見ると 話しかけて俺の肩にかけてゐる彼の手は  
薔薇の蔓 彼の顔は 花  
「なんだか 風が強く吹きはじめたね ガソリンは大丈夫かな」  
「ガソリンなんかありませんよ 冗談ぢやない 自分の力でしか走  
れませんよ」  
びしり びしりと 海の風が当る  
「これは大変なことになつた」  
「だから あれはあなただつたのですよ ごらんなさい 空間に浮  
んでゐるあなたの全体を」  
ひとひらの花びら 一つの花が飛んで行く  
まるごと一つの花が  
色どりあざやかな別の一つの花も飛んで行く  
一本の蔓 葉をつけた蔓が  
ゆがんだまま飛び去つた  
ああ 打ちよせる波 人生薔薇なり  
我等が前方に見 いまや後方に見るくろずんだ風景の中に  
転々と砂上に  
遠く小さく乱れ散る緑の針金

しづかに日が海の上をおさへつけるやうに照してゐる  
しづかに白い波の線がいろいろにもつれてゐる  
長い白い糸がもつれてゐるのだ  
ひとかたまりの色がちりぢりに小さくほどけて散つてゐる